

## 【報告】

# 紀要28号「糸賀一雄関連論考」

——合評会報告と報告者からの応答——

日時：2015年10月25日（日）  
場所：人間発達研究所「研修室」  
次第：  
午前／垂髪<sup>うない</sup>あかり：1950～60年代における  
「ヨコへの発達」概念の創出  
午後／森本<sup>つぐる</sup> 創：糸賀一雄の実存的発達保障  
論の萌芽

渡部が主宰する糸賀一雄研究会と合同で、合評会を開催した（同研究会MLに登録したい方は渡部 akiowtnb@port.kobe-u.ac.jp まで）。遠くは鹿児島・鳥取からの参加者も含めて、のべ12名であった。

### 1. 主要な論点

#### 【垂髪報告】

- ・「糸賀－岡崎－田中」という関係に、さらに「池田&田村」を位置づける必要はないか。
- ・糸賀はどこまで実践にかかわっていたのか。例、あざみ寮の「笑子さん」の事例。
- ・糸賀一雄研究会の他メンバーの研究成果。例えば森本創＝1950年代における糸賀の「自己との対決」、國本真吾（鳥取短期大学）＝1968年「ミットレーベン」、等を加味する必要性。
- ・1964年の田中の「愛護」論考は、糸賀的な用語が多数使われている。その意味で、極めて興味深い。田中が糸賀思想に共鳴して用いているのか、糸賀が「愛護」寄稿前に手を入れているのか？

- ・1965年に田中が「可逆操作」概念を着想する以前と以降とで、田中の論考を区分して読み分ける必要はないか。田中の言う「形成期」との兼ね合い。「交換性の高まり」という説明の以前に用いている「個性化」！
- ・英文ではどう表記するのか。「人格の豊かさ」等で意識すれば妥当な英訳はあるのでは。
- ・「人格」の扱いが、糸賀＝哲学、岡崎＝医学、田中＝心理学、では異なるのでは。
- ・他の心理学者、教育学者、保育学者が、「ヨコへの発達」をどうとらえているのか。
- ・他の重症児施設、島田療育園や秋津療育園が、「ヨコへの発達」をどうとらえているのか。
- ・1965-66年頃の「ヨコへの発達（ふくらみ、育ち）」への凝集化のプロセスで登場した志向性・内実を解明し再評価すべき。
- ・「ヨコへの発達」の使用を逡巡したり、または使われなくなっていくプロセスで、どのような用語や語り口に置き換わっていくのかを解明し再評価する。

#### 【森本報告】

- ・アーカイブス（デジタル資料）を今後どのように共有財産として、ルールを築きながら、活用していくか。
- ・池田、田村らの実践指導の進め方はどうであったのか。それとの対比で、糸賀の特質。
- ・園長（管理職）が指導記録を通じて職員に直

接指導を行うことの是非（今日の学校現場の実態とのかねあい）。

- ・1960-62年あたりの指導記録が少ない要因⇒どこかに散逸しているかもしれない現物を発見し集約する必要性。
- ・1950年代の糸賀を、1960年代の「発達保障」で説明するのではなく、「事上練磨（事上磨練）」「自己との対決」等の過程として説明する必要性&意義。
- ・「実存」という呼称を、田中の解説から用いるのではなく、糸賀の論考の中から丁寧に拾う。
- ・1960年代に再度書き込みが増える時期の中味（中身）の解明。
- ・富永健太郎（日本社会事業大学）が、「ミットレーベン」が糸賀の京都府立大学の講義ノート（1964年）で初登場することを指摘した際に、カナーの自閉症研究とのかかわりで記載されていることに注意喚起。近江学園、糸賀らにおける自閉症研究の位置づけや進展を押さえること。
- ・「自閉症」への言及としては、「糸賀一雄の最後の講義」（中川書店、2009）pp.26-27、「南郷」24号（創立50周年記念号）p.38（出席者一同が、アメリカのカナー教授が「早期幼児自閉症」として記載したのは、まさにこの例だと、近江学園のケースを見て合意したのであった）等々。

（文責・渡部昭男）

## 2. 合評会を受けての報告者からの応答

### 【垂髪応答】

「ヨコへの発達」について、教育・療育に加え、福祉・保育・心理学、そしてグローバルな視点から、改めて1950-60年代の近江学園、びわこ学園の実践を照射する必要性を痛感した。

島田療育園創設者、小林提樹は「生きるだけ

で本人の役目は全うされ」と、重症児の「生きがい」を追求した糸賀や岡崎らとは異なった療法観を持ちつつも、重症児の示す変化を「下への発達」、「根の発達」と表していたという。偶然にも、糸賀も『ミットレーベン』のなかで「横への発達」について「横に根を張って生きてい」と換言している。対立項として捉えられがちな二者ではあるが、重症児の「変容する姿」をなんとか捉えようとする姿勢には共通点も見出すことができる。

1966年に「ヨコへの発達」という言葉に集約されたものが、その後どのような用語や考え方に換言されてゆくのか—「ヨコへの発達」創出当初の志向性、源流への回帰のプロセスを、「the quality process of development」（『この子らを世の光に』[英訳版]、「ヨコへの発達」該当箇所）や、「human qualities」（アメリカ、1922、William.C.Bagley、IQや知能検査を教育学の立場から批判）という英語表記からヒントを得ながら、丁寧に解明していきたい。

（文責・垂髪あかり）

### 【森本応答】

三年前に私が本論文のもととなった修士論文を執筆した時には、基礎資料である近江学園の指導関係資料の整理に多くの時間を費やしてしまい、内容の分析と検討に十分な時間をとることができなかった。今回修士論文をもとにテーマを絞り、内容や文章表現を見直すことを通して、改めて多くのことに気づくことができたが、まだまだ不十分であるといわざるを得ない。

糸賀が多忙な中、職員が書いた指導記録に目を通して、多くの書き込みを行っていたことについては、その努力に頭の下がる思いであるとともに、その内容は新たな歴史の証言者となり得るものである。しかし、園長が職員一人ひと

りの指導を直接管理していたと考えると少々窮屈なようにも思えるが、いずれにしてもこのような取り組みによって、様々な困難を乗り越えながら自身の思想を高めてきたに違いない。また、糸賀と共に学園実践を支えてきた田村や池田の実践指導の進め方に関しても大変興味深い。

今後職員の試行錯誤や葛藤が書き込まれた指

導関係資料を丹念に検討していけば、三人それぞれの実践的特長や、それらがどのように結びついてきたかなど、さらに多くの歴史的事実が明らかとなるであろう。それだけに一日も早く、これまで作成されたデジタルアーカイブスが積極的に活用される日が来ることを願っている。

(文責・森本 創)